

## Rio 2016 オリンピック・パラリンピック競技大会 「Tokyo 2020 JAPAN HOUSE」運営スタッフ

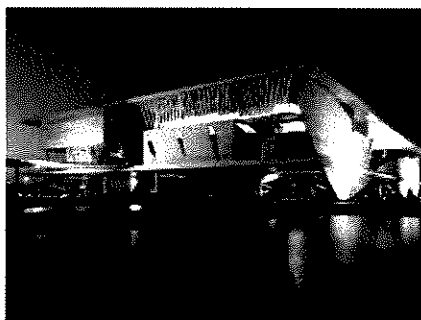
高野 千春

リオデジャネイロ 2016 オリンピック（8月5日～21日）・パラリンピック（9月7日～18日）開催期間中、現地に開設された「Tokyo 2020 JAPAN HOUSE」において、スポーツ庁ブースの運営に携わるといふ貴重な体験をすることができたので、ここで紹介したいと思う。

ジャパンハウスはこれまでもオリンピック開催都市に設置され、スポンサー、各国・地域オリンピック委員会や国際競技連盟、そして国際オリンピック委員会関係者へのホスピタリティサービスや、メダリストを中心とした日本代表選手団の記者会見が行われていた。今回は4年後に迫った2020年東京オリンピック・パラリンピックを前に大幅に規模を拡大し、2020年東京オリンピック・パラリンピック、2019年ラグビーワールドカップといった国際大会に加え、日本の技術や文化、東京都を始め全国46道府県をPRし、日本への理解を深めてもらう場として、地元リオデジャネイロ

の人々やビジターを迎え入れた。

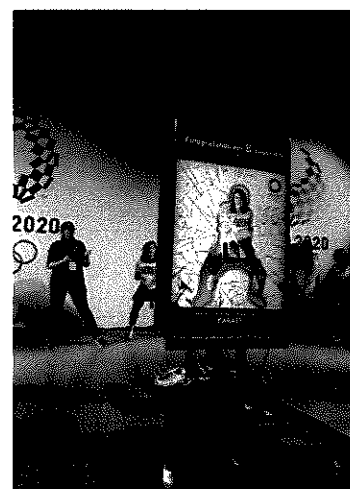
今回の Tokyo 2020 JAPAN HOUSE（以下、JAPAN HOUSE）は、東京2020組織委員会エリア、東京都エリア、日本政府エリア（総務省・文化庁・農林水産省・国税庁・内閣府・経済産業省・観光庁・スポーツ庁）、パートナーエリア、リオデジャネイロ2016大会日本代表選手応援エリア、自治体エリア、文化体験エリア（野点・浴衣・ヨーヨー釣り・書道）、在リオデジャネイロ総領事館連絡室の8つのエリアで構成された。その中の日本政府エリア内にあるスポーツ庁ブースは、日本レクリエーション協会がその管理・運営を受託し、「SPORT FOR TOMORROW」（以下、SFT）のPRや、日本発祥のスポーツ・レクリエーション等の体験コーナーを実施した。開催期間中のJAPAN HOUSE 来場者数はおよそ82,000名と報告されたが、スポーツ庁ブースでスタッフと交流した方々は延べ35,000名に上った。



Tokyo 2020 JAPAN HOUSE



JAPAN HOUSE 入口



メインステージでのMANGA photo



文化庁ブースの巨大難壇



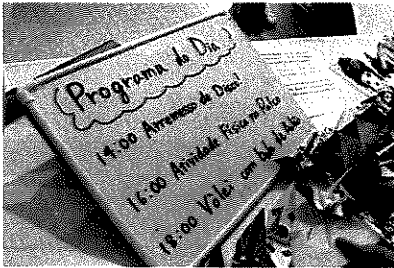
スポーツ庁ブース

SFTとは、2014年から2020年までの7年間で開発途上国を始めとする100カ国以上・1000万人以上を対象に、日本国政府が推進するスポーツを通じた国際貢献事業である。「スポーツを通じた国際協力及び交流」「国際スポーツ人材育成拠点の構築」「国際的なアンチ・ドーピング推進体制の強化支援」を通して、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントをあらゆる世代の人々に広げていく取り組みである。今回は、パンフレット・ステッカー・ピンバッジ等の配布、広報活動VTRの放映、SFT横断幕へのメッセージ記入、東京2020大会への出場を狙う若手アスリートへの説明会等を実施し、SFT活動のPRを行った。これまで自分自身もSFTの活動をよく理解しておらず、この事業が日本国内でどの程度認知されているのか気になるところである。

JAPAN HOUSE 開催期間中、日本独自の伝承遊びやニュースポーツ、レクリエーションゲーム

の体験コーナーを毎日実施した結果、実際に体験した方は延べ6000名に上り、103種類の活動を紹介することができた。子供から大人まで楽しめるプログラムの中で海外の方にも人気があった活動をいくつか挙げると、射的型の活動ではラダーゲッター・室内ベタンク・輪投げ・スポーツ吹き矢・スマイル射的・ペガーボール、交流型の活動では盆踊り・ハイタッチゲーム・〇×クイズ、課題達成型の活動では釣りっこ・折り紙・新聞紙鉄砲・リバーシ、対戦型の活動では羽根っこ・カローリング・金毘羅船船・天大中小、記録挑戦型の活動ではペアリングキャッチ・ネットパスラリー・カウンターチャレンジといったところである。オリンピック閉会式の日午前中には、安倍晋三首相もJAPAN HOUSEの視察に訪れ、スポーツ庁ブースにも立ち寄り、「羽根っこ」と「けん玉」を体験された。

JAPAN HOUSE では展示型ブースが多い中、



本日の体験プログラム



だるま落とし



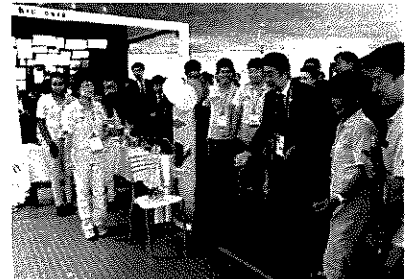
羽根っこ



あっちむけホイッ!



スポーツ吹き矢



安倍首相も「羽根っこ」を体験



ペガーボール



卓球バレー

体験型のスポーツ庁ブースには歓声や笑いが起こるので人が集まり、参加者本人も周囲にいる人々も一緒になって大いに盛り上がった。日本の伝統的な遊びや日本らしいモノに人気が集まったが、日本語（文字）も大人気で、体験コーナー参加後に、本人の名前を日本語で書き込んだステッカーをプレゼントしたところ、その反響の大きさに私達も大変驚かされた。子供だけでなく大人も夢中になってプログラムを楽しむ姿が印象的であり、4年後の日本でもこのような光景を増やしたいと強く感じた。

私がスタッフとして現地で仕事をしたのは、8月11日から24日の2週間だったが、JAPAN HOUSEでの仕事はローテーションを組んで行われたので、自分の空き時間には自由にオリンピック競技を観戦できた。治安問題の影響等でサッカー・バレーボール以外のチケットはいつでも比較的簡単に購入できたので、日本人選手がメダルを獲得した「レスリング女子フリースタイル48kg級・53kg級・58kg級・63kg級決勝」「卓球男子団体決勝」「バドミントン女子シングルス

準決勝」「バドミントン女子ダブルス決勝」もS席で応援し、全ての選手の真剣なプレーに心から感動した。中国人応援団に対抗して、応援席の見知らぬ日本人と一緒に必死に応援した連帯感も楽しい思い出になったが、何の種目で誰が対戦しているのかも分からないまま応援自体を楽しむ、お祭り好きなブラジル人ならではのスポーツの楽しみ方が印象に残った。また、会場内の至る所に警備の警察官が配置されていたが、ピリピリしたムードではなく、声をかけると気軽に写真に写ってくれたり、ボランティア・スタッフもそこで行われている試合を楽しんでいる様子は、オリンピックが平和の祭典であることを実感させてくれた。

最後に余談ではあるが、スタッフ宿舎はオリンピック・パラリンピックのメイン会場の真向かいにあるコンドミニウム（高級住宅街）を借りたので、かなりリッチな気分で生活していたのだが、時たま台所の蛇口が外れる、ドアノブごと外れるといったハプニングが起き、ブラジルにいることを実感した。



名前入りステッカー



やったー！！



日本の応援グッズで盛り上がるブラジル人



会場警備の警察官と



ウエルカム・ボランティア



冬でも日差しが強い…



宿舎のコンドミニウム



ありゃっ？